

広島県医師会被爆伝承コーナー 竹内鋳特別展示式

— 激動の時代を駆け抜けたヒロシマの医師の原点 —

と き 令和6年8月7日(水) 午後2時

ところ 広島県医師会館 広島県医師会被爆伝承コーナー



広島県医師会	会 長	松村	誠
広島県医師会	副 会 長	吉川	正哉
広島県医師会	副 会 長	岩崎	泰政
広島県医師会	常任理事	茗荷	浩志
広島県医師会	常任理事	橋本	成史



左：特別展示式のポスター、右：開会挨拶をする松村誠広島県医師会会長

令和6年8月7日(水)、広島県医師会館1階被爆伝承コーナーにおいて、原爆投下時広島赤十字病院長であった竹内鋳先生の令和6年度企画特別展示式「激動の時代を駆け抜けたヒロシマの医師の原点」を開催した。

岩崎泰政広島県医師会副会長の司会により、松村誠広島県医師会会長の開会挨拶の後、来賓の山縣真紀子広島県健康福祉局地域共生社会推進担当部長、南部克徳広島市健康福祉局原爆被害対策部長、古川善也広島赤十字・原爆病院長、東幸仁広島大学原爆放射線医科学研究所長より挨拶をいただいた。

続いて、久保田明子広島大学原爆放射線医科学研究所附属被ばく資料調査解析部助教から追加展示した竹内鋳先生の手記や人となりの紹介が行われ、同時に展示された核戦争防止国際医師会議 (IPPNW) 日本支部活動の歴史～日本支部発足から現在まで～をIPPNW日本支部事務総長である田代聡先生より紹介した。また、竹内鋳先生の孫の竹内道さまより寄贈者のお言葉をいただいた。

当日は、報道5社 (新聞社2社、テレビ3社) が出席し、新聞やWebニュースなどで広く取り上げられた。

開会



岩崎 泰政
広島県医師会
副会長

式の冒頭、司会の岩崎泰政副会長より下記のように被爆伝承コーナーの経緯と今回の特別展開催に関する説明があった。

広島に原爆が投下されてから今年で79年目を迎える。その長い月日の経過によって、被爆に関する貴重な資料の散逸・風化が懸念され、3年前に広島県医師会として、当時の医療者がどのように被爆の惨状に向き合い、関わったかを次世代に伝承すべく、本会会員約6,900名に被爆関連資料の提供をお願いしたところ、当時の死亡診断書や多数のカルテ、被爆瓦、証言など、さまざまな形でご寄贈・ご協力をいただいた。これらの貴重な資料を多くの方に閲覧いただき、医療に関する被爆の実相を少しでも知っていただくことを目的に、2年前の令和4年8月6日にここ広島県医師会館1階に常設展示する「被爆伝承コーナー」を設けた。さらに昨年はブラジル被爆者協会から、貴重な南米被爆者の健康診断や健康相談の資料の寄贈があり、それらも展示に加え在外被爆者にスポットを当てた特別展を開催した。

今年は、昨日のNHKスペシャルの番組でも取り上げられた、被爆当時の広島赤十字病院の院長であった竹内鈮先生の、当時の状況を克明に記載した黒い手帳や、手記、絵画など被爆当時の厳しい医療現場がわかる貴重な資料を、ご令孫である竹内道さまからご寄贈いただき、「院長として被爆・救護・そして復興-激動の時代を駆け抜けたヒロシマの医師の原点」竹内鈮特別展を開催することとなった。

また同時に、来年被爆80年に長崎で開催されるIPPNW世界大会に関して、IPPNWの歴史と広島県医師会とのつながりをまとめた展示ブースも披露する。



被爆伝承コーナー

開会挨拶 (要旨)



松村 誠
広島県医師会
会長

今日は大変暑い日で、36度を超えているが、79年前の今日はこのようなものではなかったと思う。大変な生き地獄、惨禍が広島市で起こった。

広島県医師会、ヒロシマの医師として79年前の8月6日は、われわれの原点である。被爆し、自らの負傷を顧みず、それは竹内鈮先生もそうだが、ひたすら被爆者の救護活動に当たった、あの日、何が起こったか、医療現場を含めて、原爆の悲惨さを伝えねばならないということが私たちの原点、責務だと思う。

核兵器に対する処方せんはない。ではどうするか。本日ご紹介する核戦争防止国際医師会議(IPPNW)の活動である。戦争を起こさない、核兵器をなくすことが私たちの責務だと思っている。ヒロシマの医師として、原点から今日まで歩んできたことをご覧いただければと思う。

竹内鈮先生のお孫さんの道さまよりご寄贈いただいた資料の中に、当時の広島赤十字病院で何が起こったのか、それを克明に記録した黒い手帳がある。私たちはそのノートのことを「竹内鈮ヒロシマノート」と呼んでいる。

今日はそれらを見ていただき、われわれヒロシマの医師として、核兵器のない世界に向けて、医療側からも取り組んでいきたいと思う。

来賓挨拶 (要旨)



山縣真紀子
広島県健康福祉局
地域共生社会
推進担当部長

広島赤十字病院の初代院長であった竹内鈮先生は、執務中に被爆され、骨折などの重傷を負われながらも、被爆された人々の治療に当たられ、戦後は、病院の再建にご尽力されたと同っている。

今日ここに展示されている資料は、被爆者、あるいは被爆者医療の実相を伝えるとともに、十分な薬も治療器具もない大変な状況の中で、懸命に命と向き合っただけの医療関係者の方々の存在を後世に語り継いでいける大変貴重な資料であると考えている。そして、そのときの精神は今も引き継がれていると感じている。

今年も、松村誠会長および広島県医師会には、在外被爆者の援護のために南米・北米の健康相

談等事業に多大なご協力をいただいているところであり、この場をお借りして、感謝申し上げます。本県としても、高齢化が進む国内外の被爆者の援護のさらなる充実に努めてまいりますので、引き続き、ご支援・ご協力をお願いします。



南部 克徳
広島市健康福祉局
原爆被害対策部長

79年前、原子爆弾が人類に向けて、初めて広島の街に投下され、多くの尊い命が奪われた。そして、被爆者の皆さまは、悲しみに耐え、憎しみを乗り越えて、「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」との思いで、自らの体験を語り、平和への願いを発信されている。

昨年のG7広島サミットでは、平和記念資料館の視察や被爆者との対話が実現し、被爆の実相に触れた各国首脳は、それぞれの平和への思いを芳名録に残され、全人類の共存と繁栄を願う「ヒロシマの心」をしっかりと受け止めていただいた。

このような中、2年前に開設されたこの被爆伝承コーナーで、広島赤十字病院の初代院長を務められた「竹内釦」氏の特別展示が行われ、自ら被爆されながらも、懸命に救護に当たられ、市民を勇気付けられた活動が紹介されることは、被爆の実相を後世に伝える貴重な機会であり、大変意義のある取り組みであると考えている。

今後とも、被爆の実相を「守り」、多くの方に「広め」、次の世代に「伝える」取り組みを、引き続き、本市とともに取り組んでいただけることを心から期待したい。



古川 善也
広島赤十字・
原爆病院長

竹内先生は、昭和9年当時陸軍少将であったが、当院の建設を東京本社から依頼され、日本中を視察し、昭和14年、鉄筋コンクリート、地上3階地下1階のその当時としては素晴らしい病院を作り上げた。鉄筋コンクリート造りであったことで、原爆の惨禍に外壁は耐えている。しかし、窓ガラスは粉々に砕け、屋内はぐちゃぐちゃになり、がれきによって竹内先生は7カ所骨折をされた。骨折にも耐えて、陣頭指揮を取って押し寄せる原爆被爆者の方の救護にあたられた記録が残っている。

また当時、食料なども非常に不足し困った状

況であったが、軍と交渉し、食料などを入手されるなど非常に素晴らしい手腕を発揮された。その後、昭和23年、当院の再建の道ができたことで後進に道を譲られ、広島で開業された。

今回、79年経つ原爆の日。その記憶が薄れていく中で、当院の初代院長の特別展示をしていただくことは、非常に名誉なことで、松村会長をはじめ、広島県医師会に感謝している。

ぜひ、このような惨禍が二度とないことがはっきりするまで、われわれは原爆の惨状を伝えていかなければならない。引き続き、このような歴史を伝えていく試みを続けていきたい。



東 幸仁
広島大学
原爆放射線医科学
研究所長

昨日は、原爆放射線医科学研究所の所長としての立場ではなく、1国民、1市民として平和式典に参加した。広島市長からの平和宣言、総理大臣、県知事あるいは国連事務総長からの挨拶があり、中でも子ども代表からの平和への誓いは短くシンプルな言葉で、大変心を打つもので

あった。

「目を閉じて想像してください」という言葉から始まったと思う。79年前、8月6日にあつてはならない惨禍がもたらされた。戦時下で、さらに終戦間近であったとはいえ、市民にとっては、いつもと変わらない日常があつたはずである。それが原子爆弾により、一瞬にして奪われ、その後の後遺症を含めて、大変な惨禍をもたらし、いまだに続いている。

このような過ちを人類は二度と繰り返してはいけないことを改めて強く認識した。子どもたちの誓いの終わりは、「広島を学びましょう。感じましょう。被爆者の言葉に触れましょう」であった。今生存している被爆者は、約10万人に減少し、平均年齢は85歳を超えている。

今後、直接被爆者の方からお話を伺えなくなる可能性が増える。そのためにもさまざまな資料を後世に伝え、伝承していくことは大変大きな重要な課題である。

特に、広島県医師会被爆伝承コーナーは、被爆に伴う重要な医学資料を展示している。原爆放射線医科学研究所は、被爆資料調査解析部が資料の解析展示の一部に関わっている。私たちが決して忘れてはならない歴史的瞬間である、広島における原爆投下の被害と、その後の医療

従事者たちの尽力をたたえ、伝えるために設けられたこの展示だと思う。

今後も被爆者とその家族に寄り添い、その経験から学び、未来につなげるために、私たちはこの場を大切にしていく必要がある。被ばく医療の歴史は、多くの苦難と挑戦を克服してきた医師や看護師、そして支援する全ての方々の努力によって築かれてきた。皆さまの奉仕の精神と尽力は、私たちにとって大変大きな教訓となるべきものである。被爆者の方々と向き合いながら、医療の進歩とともに、進化する医療体制の必要性も感じている。これからも原爆放射線医学研究所として、全力を尽くしていく決意である。

この被爆伝承の展示を通じ、国内だけではなく、世界に対してもその影響を未来につなげる重要性を伝え、考える機会になると信じている。

新コーナー紹介



久保田明子
広島大学
原爆放射線医学
研究所 附属
被ばく資料調
査解析部助教

今回のコーナーのチラシに、カタカナで「ヒロシマの医師の原点」と書いてある。県医師会がこの資料をお預かりした時に、松村会長が力強くおっしゃった、自然に出てきた言葉である。私の竹内鈞先生の資料研究もそこから始まった。

その原点が、展示の黒い手帳である。もともとは金銭出納帳であった。竹内先生は大変な重傷を負われ、自宅にも帰られず、病院の中にあった未使用の出納帳を取り出し、いつもこのノートを携えていたと考えている。

手帳の中身については、スキャンしたものを展示している。今回、特に驚いたのは、医師の資料は被爆者のカルテが多いなか、竹内先生の手帳からは、病院全体、病院にいる全員をどう守っていくか、どう助けていくかに、力を注いでいることが分かったことである。こういう資料はめったになく、大変貴重な発見であろう。竹内先生の資料は多いが、今回の展示はその一部である。

竹内先生は福岡県柳川の出身だが、いつも故郷を大事に思っていた。例えば竹内先生は絵を描かれるが、画号が柳川である。やわらかいタッチで、中国の古典文学や経典から言葉を引いた漢文を添えられ、竹内先生の人となりが見える。豊かな教養と優しさを持った先生が、被

爆後の戦場のような広島で陣頭指揮を執っていた深みもぜひ感じていただきたい。

原爆についての発言は少なく、今まであまり竹内先生のお名前は出て来ることが少なかったが、今回の展示で多くの方に知っていただき、多角的な竹内先生を感じ取ってほしいと思う。

資料は竹内先生のお孫さんの竹内道さまからご寄贈いただいた。竹内鈞先生の娘婿の竹内辰五郎先生で道さまのお父さまも広島で医師として活躍され、古い時代にも広島大学医学部、原医研と交流があった。辰五郎先生が竹内鈞先生を大変尊敬しており、この資料を守った。それを道さんがまた守って、県医師会に引き継いだ。こうやって継承していくのだと思う。

松村会長が直感的に指摘した「ヒロシマの医師の原点」が、このように継がれ、県医師会によって守られ、末永く皆さんに知っていただくことになれば幸いである。



竹内鈞ヒロシマノート



田代 聡
IPPNW日本支部
事務総長

竹内先生の展示の右隣にあるのが、核戦争防止国際医師会議 (IPPNW) の展示である。IPPNWは、冷戦末期に核戦争の危機がある時、アメリカとソ連の心臓病学者と仲のよかったエーゲニイ・チャゾフ先生とバーナード・ラウン先生が作られた団体である。先ほど松村会長が言われたように、被爆者の治療法はない、予防するしかない、究極の予防医学として核戦争を医師の立場として止めなければならないとの思想のもとに

作られた団体である。その活動が認められて1985年にはノーベル平和賞を受賞した。

広島県医師会、ヒロシマの医師は発足当初からこの団体に深く関わっており、特に広島県医師会は中心としてずっと活動をしている。展示にもあるが、広島で2回世界大会を開催した。IPPNWの歴史、広島県医師会とのつながりをきれいにまとめて展示することができたのは、本当に意義があることだと思う。

こういうことが未来の予防医学、将来の核戦争に対する予防医学として役に立つものの第一歩として、ここから発信できればと考えている。

来年2025年は被爆80年になる。長崎でIPPNW世界大会が開催される。この大会に向けて、ぜひこの歴史を整理して、皆さんに参加していただけるように、そのためにもこの資料が役に立てばと思う。



新設されたIPPNWコーナー

寄贈者からのお言葉



竹内 道
フィルム・
プロデューサー

今日は、特別展示式にお招きいただき、感謝申し上げます。祖父竹内釵が残した資料を広島県医師会伝承コーナーに展示していただき、また皆さまのお話を聞き、感激している。私の父、竹内辰五郎は岳父である竹内釵を外科医として、人として、とても尊敬していた。父は祖父の残したものを大きな金庫に入れて、大切に保管していた。

昨年の7月、長女である私が実家の整理を担当した。父が大切に守っていた資料を今後どうしようかと思案した時、広島県医師会が父の意向を最も理解してくださるのではないかと思った。

広島県医師会の皆さまとは、令和4年のIPPNW日本支部設立40周年記念の時に、祖父のことについて講演をさせていただいて以来のご縁である。松村会長に「黒い手帳」を含めていろいろな資料を見ていただき、寄贈することについて、ご快諾をいただいたのが、1年前の

ことである。このような素晴らしい展示会をこんなに早く実現していただけたことは、夢にも思っていなかった。松村会長、広島県医師会、事務局の皆さまに、時間をかけて丁寧にご対応いただいたことに深く感謝をしている。

竹内釵という人にはたくさんの側面があった。外科医であり、軍医であり、学者でもあった。短歌、俳句を詠み、絵を描くことが大好きであった。今回の展示で、寡黙であったが、情熱的な外科医としての祖父の仕事ぶりを見ていただければ幸甚である。

IPPNW日本支部設立40周年記念の時に、サーロー・節子さんの生涯を描く映画、「ヒロシマへの誓い」を上映していただいたことを懐かしく思い出す。今年の5月にはこの映画のテレビ版が全米の公共テレビにて放送され、アメリカの75%の地域で視聴された。これからは令和7年に向かって、アメリカの中でも保守的といわれる「赤い」州にてこの映画を上映し、核兵器のもたらす非人道的な惨状について、認識してもらえたいと思う。

広島赤十字病院にて、治療や復興に奔走した祖父の資料とIPPNWについての展示が同時に開始される意味について考えさせられる。特別展は1年間開催されるとお聞きした。広島の方のみならず、日本中、世界中の方たちに見ていただきたいと願う。

遺族の代表として、広島県医師会の皆さまに心よりお礼を申し上げます。

閉会挨拶



茗荷 浩志
広島県医師会
常任理事

今回は、広島県医師会の被爆伝承コーナーの本年度の企画として、竹内釵先生の特別展を開催した。松村会長の挨拶にもあったように、副題として、「激動の時代を駆け抜けたヒロシマの医師の原点」を掲げている。そういった目でもう一度見直していただくと、もっと違った視点で見られるかなと思う。

また、8月6日を中心とした約1週間は被爆伝承についていろいろと報道されるが、この時期を過ぎると報道されなくなる。そういったところが被爆伝承の弱いところだと思う。広島県医師会としてもいろいろな面を捉えて継続していきたいと思う。

担当副会長コメント

昭和20年8月6日に広島に人類史上初めて実際の武器としての原爆が投下され、今年で79年目を迎えた。広島県医師会は原爆投下から長い月日が経過することで、会員や医療機関、さらにその親族が所有する、被爆に関する貴重な資料の散逸や風化を懸念するとともに、当時の医療者がどのように被爆の惨状に向き合い、関わったかを次世代に伝承したいと考え、3年前に本会会員に被爆関連資料の提供をお願いした。すると当時の死亡診断書やカルテなど、さまざまな形で寄贈・協力をいただいた。これらの多くの貴重な資料を、広島県民はもちろん県外や国外から広島に来られた方に閲覧いただき、被爆の実相を知っていただくために、2年前の令和4年8月6日に広島県医師会館1階に常設展示する「被爆伝承コーナー」を開設した。さらに昨年は、ブラジル被爆者協会から、貴重な南米被爆者の健康診断や健康相談の資料の寄贈があり、それらも展示に加え、在外被爆者にスポットを当てた特別展を開催した。

今年は、8月6日放送のNHKスペシャルの番組で取り上げられた、被爆当時の広島赤十字病院の院長であった竹内鈿先生の、当時の状況を克明に手記として記載した黒い手帳をはじめ、写真やご自身が描かれた絵画など、被爆当時の厳しい医療現場が分かる貴重な資料を、ご令孫の竹内道さまからご寄贈をいただき、竹内鈿特別展を開催することができた。資料には被爆直後は一時意識も失い大怪我を負われたが、直ちに院長として現場で被爆者の医療対応に当たられた状況が克明に記載されていた。

式では広島県健康福祉局・山縣部長、広島市健康福祉局・南部部長の挨拶に続き、被爆後の昭和20年12月に広島状況を憂いた昭和天皇が来広された際に、竹内先生が被爆者・被災者の医療についてご進講を行っている場面の絵画を、今回の企画展にあたり貸与していただいた広島赤十字・原爆病院の古川院長、さらに原医研の

東所長に挨拶いただいた。また原医研の久保田助教には今回の展示内容の説明をしていただいた後、IPPNW日本支部事務総長で原医研の田代教授には、挨拶とともに来年令和7年の被爆80年目に長崎でIPPNW世界大会が開催されるため、被爆伝承コーナーに隣接してIPPNWの歴史と広島県医師会とのつながりをまとめた年表を展示したことを報告いただいた。最後には貴重な資料を寄贈いただいた竹内道さまより、謝辞とともに寄贈いただいたきっかけや当会との関わり、さらに竹内鈿先生のエピソードなどを披露いただいた。



天皇陛下、ご巡幸の図

この絵は現在広島赤十字・原爆病院に常設されていますが、古川善也院長のご厚意で8月31日まで広島県医師会館で出張展示しています。

今後も被爆伝承コーナーを訪れた方々が、当時の医療関係者の体験した被爆の実相を共有できるように、さらに展示内容を充実させていきたいと考えているので、会員の皆さまもご自宅や医療機関に被爆に関する資料をお持ちであれば、ぜひご協力いただきたい。さらに来年の長崎でのIPPNW世界大会に向けた新たなIPPNWのブースも開設したので、ぜひ会館に足を運んでいただきたい。

(岩崎 泰政)

広島県医師会被爆伝承コーナー

「令和6年度竹内鈿特別展」及び「IPPNWの歴史展」開催中

被爆当時の広島赤十字病院の院長であった竹内鈿先生の、当時の状況を記録した手帳や手記、絵画、写真など被爆当時の医療現場が分かる竹内鈿特別展を開催しております。

また、広島県医師会がIPPNW創設初期から取り組んできた「IPPNWの歴史展」も同時開催しています。

ぜひ、この機会に広島県医師会館にお越しいただき、ご覧ください。